

見習い召喚師

# リーネの災難

天戸祐輝

表紙イラスト：舞猫ルル

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『見習い召喚師 リーネの災難』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



見習い召喚師  
リーネの災難

天戸祐輝  
表紙 / 舞猫ルル

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

#### リーネ・イルタ

才能はあるものの少しドジな三つ編みの美少女。貌は童顔だがスタイルはよい。学園帰りに悪魔に襲われた際、助けてくれたフィアンに憧れ、彼女と同じシャーマン（精霊使い）になる事を決める。

#### フィアン・レイクラット

リーネより一つ年上の美少女シャーマン。細いながらもグラマラスなスタイルを有し、悪魔に一度も負けた事のない少女。類まれな才能を持ち、現在では精霊女神と云われている。

#### 龍人

悪魔の中でも最上級の魔物。全身が鱗で覆われ、首が長く貌が竜そのもの。太い尻尾もある。二メートルを超える巨体。

「も〜〜〜うっ、なんであんなに怒られなきゃいけないのよっ！」

「ほんと、災難だったよね」

日が傾き、薄暗くなり始めた時間。二人の少女が石畳でできた路地をトボトボと歩いてた。

一人は赤みがかり、ピンクに見える長髪を三つ編みに結った少女。もう一人は、赤茶の髪をショートカットにした少女だ。

ショートカットの少女は当たり障りのない平凡な顔に身体、おっとりとした性格である。う事が一目で分かる、特に目立たない普通の娘だ。だが、もう一人の彼女は同世代の少女たちと比べても顔の輪郭に丸みを帯び、リスのように大きくてクリツとした水色の瞳が、一際その少女を幼い印象にさせている娘である。

「まったく、どうしてわたしが召喚師になっちゃいけないのよ」

三つ編みの少女が小さいながらも美麗な稜線を描く美鼻をツンツと突き上げ、不満そうに水色の瞳を吊り上げる。色が薄いものの小さく整った美唇は尖り、一目で機嫌が悪い事が分かる態度だ。

「でも召喚師って難しいんでしょ？ 長い呪文も覚えなければいけないし、何かと契約する時は命だつて懸けなきゃいけないって聞くよ」

二人は魔狩師まがりし育成学園という、人外を退治する者を育てる特殊学園に通う生徒である。

それは彼女たちの着ている制服——白を基調とし、所々に薄紫のラインが入った服を見れば一目瞭然である。

ノースリーブのブラウスに、幾重もの折り襷がついたミニのプリーツスカート。一見するとテニスウェアのような印象を受ける制服を纏った二人は、中世の英国を思わせるレンガ造りの家々が立ち並ぶ町並みを横目に、路地をトボトボと歩き続けた。

「先生もあんなにリーネちゃんを怒る事ないのね、将来なる魔狩師の書類を提出しただけで」

学園での事を思い出し、ショートカットの少女が三つ編みの少女の名前を呼び、その怒りをなだめるように話しかけた。

怒られた原因は、リーネが突如召喚師になると言い始め、早朝と共に魔狩師の志望書を出したからである。召喚師とは学園の優秀者でもなるのは難しく、お世辞にも『勉強ができる』とはいえない彼女がなれるものではない。

最初こそ担任の教師は「お前には剣士か体術の方が向いている」と言っていたのだが、それでも彼女がしつこく食い下がったため、三十分にもわたりどうしてダメなのかを、成績を指摘されながら怒られてしまったのである。

つまり『身の程を知れ』と全否定されてしまったのだ。

「ホンッット！ あの教師、わたしを苛めて楽しんでたのよ、きつと」

三つ編みの少女が目尻を吊り上げ、担任の顔を思い浮かべながら毒づく。

もともと彼女は、自分から進んで魔狩師育成学園に入学したわけではない。数年前、魔術の欠片も知らなかったリーネは、突如魔物に襲われた事があった。助けてくれる者もいなかった状況。だが彼女はテキトウに叫んだ言葉で魔法を発動させ、襲いかかってきた魔物を退治してしまった経歴を持っている。

その事が学園に知られ、「百年に一人の才能」と半ば強引に入学させられてしまったのだ。「でもリーネちゃんなら、召喚師よりも剣士とかの方がいいんじゃない？ 武器がいやなら魔術師とかでも……」

「うう……」

教師に言われたセリフを友達にまで言われ、彼女は幼い顔を曇らせた。その言葉は今まで散々言われた言葉だからだ。

何も知らずに魔物を倒した実績を期待され、魔狩師育成学園に入学したものの、彼女の成績は学年最下位。毎回ビリ争いをするほど悲惨なものである。しかしながら、武器訓練の時は初めて見る剣や槍などを器用に使い。試しに魔術を使えといえは数分で魔術書の数ページをあつさりと言え、簡単に魔法を発動させてしまう。

難を言えば、力の加減がまったくといいほどできないところだ。武器の時は剣に流す魔力の量を調整できず破壊、あるいは溶かしてしまい。炎の魔法を使えば火の玉程度

の魔術が火炎放射器と化し、風の魔法を使えば学園中の女子のスカートを捲り、男子全員の目を楽しませてしまう。魔力のコントロールを知らず、常に力を暴発させてしまう恐ろしい少女である。

「あの魔力をちゃんと使えば、魔狩師として有名になれると思うよ」

スカートを捲られた時の事を思い出し、ショートカットの少女は顔を赤らめながら話した。

「それに、その身体なら……魔物も……」

「ん、どうしたの？」

ゴニョゴニョと口ごもり、恥ずかしげに話し始めた友達にリーネは首を傾げた。彼女の視線は何かを物語るように自分の身体へと向けられ、上から下へと移動していく。

幼い風貌の顔と比べて、彼女の細い肢体は顔からでは想像できないほど発育のいいものだった。

Fカップはあろうお椀型の峰乳は、ブラウスの胸元を大きく膨らましてその形を現し、今にもボタンが弾け飛んでしまいそうなほど布地を張っている。夕日で白い制服から浮き出す肢体のシルエットは、峰乳から括れた腰へと魅惑的なラインを浮き出させ、プリーツスカートの後部はふつくらと膨らみ、下に隠されている大きな桃の形が布に陰影しているほどだ。

健康的な肌をした細くしなやかな両腕は、ブラウスの肩口からその全てを外気に晒して艶めかしく夕日を反射させ。今にも下着が見えそうに裾をヒラヒラとさせるスカートからは、ムチムチと肌の張った瑞々しい太腿が見え隠れし、太腿から下の細脚を彩っている水色のニーソックスが、少女らしくも甘酸っぱい色気を醸し出している。

幼い顔と細いながらもグラマラスな肉体。アンバランスな容姿を持ったリーネは、可愛らしくも蟲惑的な魅力を持った美少女である。

「本当に羨ましい身体……これなら魔物だって……」

「ちよつ、ちよつとつ！ 変な目で見ないでよお」

同性に身体の査定をされるように見られた羞恥に、三つ編みの少女は慌てて胸を片腕で覆い、スカートの裾を引っ張って太腿を隠した。

友達の言いたい事は察しがつく。魔物は凶暴な生物であり、男は殺戮を樂しむだけに命を奪うが、女が相手だと態度が違う。彼らは人間の男と同様の性欲を持ち、命を奪う事よりも先に犯す事を考えるからだ。無論、犯した後は命を奪い、その柔らかな肉体を喰らおうとするのだが、胸やお尻が大きく魅惑的な身体をしていれば、魔物が隙を作る可能性が高い。

「もういいでしょ。わたしは身体で隙を作らせるよりも、精霊を召喚してカッコよく魔物を倒したいのっ！」

羞恥に目尻に溜まった涙を飛び散らしたリーネは、身体を少しでも揺さ振って恥ずべき部分を隠そうとした。しかし、龍人はさらに羞恥を与えるように両脚に巻きついていた触手の切っ先を淫部に向かわせ、ピンクに見える薄い草むらを搔き分けながらまだ開いてもない女膨らみを撫で回し、強引に柔らかな淫唇を左右に広げていく。

ゆっくりと左右に広げられ、鮮やかな色の粘膜と隠されていた秘孔を露にされていく淫部には、羞恥に熱くなった肉体を冷ますように部屋の空気が滑り込み、彼女をさらなる恥辱へと追い込んできた。

「クハッハッハッ！ 恥ずかしいか小娘、だかもつとだ、もつとお前を辱めてくれるぞ！」  
 ビリッ！ ビリビリビリイイイイイイッ！

「きゃうう——っ！」

リーネをさらに辱め、絶望を与えるようにブラウスの内部に忍び込んだ触手が激しくのたうち、風船を割るような勢いで制服の胸部を引き裂き始めた。淫らに破られたブラウスの胸部からは、水色のブラに包まれたFカップの峰乳が零れ、柔肌を張った瑞々しい肉果実を披露していく。ブラカップの中からは薄い色の乳輪が僅かにはみ出し、触手の切っ先で剥られる尖った頂がブラの布地を押し上げている。

「顔と違って、胸は随分と大きいじゃないか？ 黴りがいがあるそうだ」

「やめてよ、ケダモノっ！」

プチイイイイッ!

「はくっ!？」

胸を包んでいた下着が上級悪魔の手で簡単に引き千切られ、大きく柔らかかな肉果実が揺れながら悪魔たちの眼に映され、薄ピンクの乳芽が幾多の視線に貫かれてしまった。胸と淫部、本来隠すべき部分から布を奪われてしまった少女は、全身を燃やしてしまいそうな羞恥に耐えながら唇を噛み締め、水色の瞳で陵辱魔を睨みつけた。

「くううっ……アンタなんて……絶対に許してなんかやらないんだから……」

精一杯の言葉だった。彼女には龍人に勝つ実力も、逃げ出すための策略もない。だが、心まで折れてしまえば、召喚師を目指した自分すら呪ってしまいそうだ。

露にされてしまった峰乳や淫部には、無数の針で突っつかれているような視辱の刃が突き刺さり、敏感な乳芽と女核が集中的に見られている事を感じてしまう。

「犯してやるぞ、その身体の隅々まで貫き、お前の魂まで犯してやる!」

龍眼の前でM字開脚に拘束し、恥ずべき部分を晒す三つ編み少女の痴態に興奮した龍人が、猛り声をあげながら彼女の肢体を絡めた触手で下方向に引き降ろし始めた。

「これ以上、何をするつもっ!？」

涙に濡れた水色の瞳を下に向けたリーネは、そこにあつたモノの醜悪な不気味さに言葉を失った。

龍人の身体に添うように引き降ろされていく肢体。その先には、触手を無数に生やした彼の股間部があり、触手より一回り太い雄肉が凶暴な亀頭部を少女の淫部に向け、全体をピクピクと震わせながら待ち構えていたのだ。

太さは五センチ、長さは二十数センチといったところだろうか。その人外の雄槍は一回り太い槍先を膨らませながら、二本の触手で淫唇を左右に開かせた淫部に近づけていく。

「いや……こんなの……」

肉体を穢される恐怖に慄き、心が暗い闇に覆われていく。薄紅色の粘膜を晒す淫部には、自分の肉体が引き降ろされていく度に熱い雄熱の猛りが伝わり、炎に煽られているような熱が秘孔の内部にまで伝わってくる。

「怖いのか小娘。だがどんなに嫌がろうとも、この俺を喚んだ償いをその身体に刻み込んでやるぞ、クク……」

陵辱魔はリーネの心を傷つけるように肢体をゆつくりと降ろし、拷問槍のように反り勃つ己の肉根に近づけていく。

（やだ……こんな悪魔に犯されるなんて……わたしの初めてがこんなバケモノに……）

心が暗闇に覆われ、底なし沼に引きずり込まれていくような悲しみを感じる。淫部に感じる雄熱は、純潔を奪われるカウントダウンのように感じ、少女の中から希望を奪い去り始めた。

クチャツ……。

「くはあっ！」

召喚を間違つたにしては、あまりに大きな代償に涙を伝わせようとした瞬間。濡れた音と共に小さな秘孔に焼け鉄のような熱さを感じた少女は、クリツとした小動物のような瞳を限界まで見開き、全身を凍りつかせた。

触手によってゆつくりと降ろされていた肢体が、とうとう龍人の肉槍へと到着してしまつたのだ。

初めて雌性器に触れられてしまつた処女孔には、火傷してしまいそうな高熱が伝わり、彼女の心に穢される事実を刻み込んでくる。触手と違い、秘孔に触れた雄槍にはゴムのような柔らかさはなく、肉幹の表面をびっしり包んだ龍鱗の硬さしか感じられない。

「くあ……やめて……こんなの挿れないですよ……ぎゃひっ!？」

異質な雄槍の感触に呻き、挿入を拒否する言葉を吐いている中。突如秘孔にピリツとした激痛が趨り、龍のペニスが肉体を貫こうと秘孔を押し広げてきた。しかし、触手に嬲られていたとはいえ、指や舌での愛撫を受けていない処女孔に、人外の肉槍が簡単に挿入できるとはならず、広がった膣口が亀頭に被さるだけで膣内を貫く事はできない。

「なんて硬い孔だ。まさかお前、初めてなのか？」

「はうっ……うっ……はあはあはあ……」

リーネは何も答えない。ただ瞳をぎゅつと閉じ、眉間に皺を寄せて苦しげな息を吐くだけだ。だが、龍人は彼女の膺口の硬さで処女だと気づいたのだろう。禍々しい龍顔に不適な笑みを浮かべると、蛇を思わせる長舌で少女の幼い顔を舐め始めた。

「まさか処女だとは思ってなかったぞ。一気にそのマ○コを貫き、お前の肉体を淫乱な雌の身体に造り変えてやる！」

「やめ……犯されたくない……ぐはっ!! はぐあああああああああああああああつ！」  
穢れない肉体に興奮した上級悪魔が、彼女の肉体を一気に貫こうと肢体に絡めた全ての触手で少女を下へと引つ張り、強引に小さな処女孔に人外の肉槍を突き挿れようとし始めた。強引な挿入に少女の唇からは痛々しい悲鳴が奏でられ、人外の興奮を高めるように部屋中に木霊していく。

「裂けるっ……裂けちゃうっつっ！」

リーネを下へと引つ張る全ての触手がピンと張り、股間部を裂かれるような痛みを叫ぶ彼女の肉体を背後に反らしながら、拷問の如く秘孔を拡張させていく。M字開脚のまま駅弁体位の状態にされた肢体は、お椀型の峰乳を揺らしながら薄ピンクの頂を天に向け、嫌々と顔を振り長い三つ編みを左右に乱し靡かせた。

スカートが捲れ、少しずつ広げられていく秘孔は、本当に裂けてしまいそうなほど充血し、下級悪魔たちの興奮した視線と共に龍のペニスが突き刺さってくる。

「がはああっ！ 痛いっ、入らない……こんなの挿入<sup>はい</sup>らないよお……」

閉じた瞳から涙が滲み出し、赤く染まった頬に伝っていく。唇からは苦痛の悲鳴しか洩れず、彼女を貫こうとする龍人と、見ている下級悪魔たちをさらに興奮させた。

「いいぞその悲鳴っ、もつと叫び、もつとこの俺を興奮させろ、小娘！」

「がふっ、もう裂ける……本当に裂けちゃう……ひぎいっ！」

興奮に眼を輝かせた上級悪魔が、自分の触手でふもとから縛りつけた大きな肉果実を巨大な手で驚掴みにし、乳芽を指の間で転がしながら揉みしだいてきた。腰は彼女の秘孔を貫こうと前へと突き出し、小さな秘孔がミシミシと広げられる音が聞こえる。

「もう少しだ。もう少しで先が挿入るぞ……」

「あぐうああ……もうダメ……裂けちゃ……」

グジュプッ！ ジュブ……ジュブジュブジュブウウウウウウッ！ プツッ！

「がふあッ!? あがぁ……あがアあああああああああああああああああああ

ツッ！ ツツツ!!

拷問のような触手の引っ張り、そして、前へと突き出した龍人の腰がとどめとなった。ミチミチと音を鳴らしていた秘孔が最大にまで押し広げられ、一気に人外の雄槍が処女の膣内を貫き、その切っ先を子宮口にまで突き刺してきた。

まだ完全に濡れていなかった膣内は、うろこに包まれた肉槍に拡張されて雄を受け入れ

る道を作られ、最奥への道を塞いでいた純血の証が簡単に引き裂かれてしまった。

瞳を見開き、大粒の涙を飛び散らしながら悲しみに絶叫をする彼女の肢体には、準備のできていない処女孔に無理やり雄槍を挿入された激痛が趨り回り、肉体を左右に引き裂かれたような痛みを強いてくる。うろこに覆われた雄肉に拡張された腔内は、猛る雄熱に胎内が焼き尽くされているような熱を感じ、破瓜の激痛と共に彼女の脳を直撃してきた。

「ぐはあああッ……あぎいッ！　ああ……がはッ……ッ！」

まだ硬いままの腔内を貫かれた衝撃に発育のいい肢体は硬直し、全身をビクビクと痙攣させながら天に向けた両胸を揺らした。身が裂かれたような激痛に見開いたままの水色の瞳は涙を零れさせ、後ろ手に拘束された両手が何かに助けを求めるように開閉を繰り返す。M字に開脚された両太腿の内側では、クッキリと浮き出した貞操筋が痙攣し続け、大きく広げられて龍人の股間部にぶつかった秘孔が、小刻みに震えながらうろこに覆われた硬い肉幹を啜え込んでしまう。

「処女のクセに俺のモノを根元まで啜え込みやがって、この淫乱女め……ジュロ……」

小刻みに震えながら痛みを耐え、苦しげな息を繰り返す三つ編みの少女に侮蔑の言葉を浴びせる上級悪魔。彼は口から出した長い舌で、少女の幼い顔から両手で鷲掴みにした峰乳を舐め回し、柔らかな肉果実と、可愛らしく震える薄ピンクの乳芽に唾液を塗ってくる。しかし、その舌にリーネは何も感じない。生暖かい舌に胸や顔を舐められ、ネットリと

した唾液を塗される気持ち悪さよりも、膣内を埋め尽くした龍人の硬く熱い雄槍に耐える事だけで精一杯だった。

「なんの反応もせんとは面白くないじゃないか、ならば、せめて俺の興奮を高めるために悲鳴でもあげてもらおうかつ！」

じゅポツ！ ジゅズツ……シゅぶツ……ジュぶツジゅズツじゅプウウツツ！

「ぐはアアアアッ！ あぐツ！ 動かない……はぎい……動かないでえええツツツ！」

苦しげな息を繰り返し、快樂の言葉の一つも吐かない少女の姿に龍人は苛立ち、彼女の肢体を触手の力で上下に動かせ始めた。まだ濡れてもいない膣内に収まった人外の雄肉は、その表面をびっしりと埋め尽くしたうろこで処女だった膣壁を引っ掻き、胎外に排除するように締めつける膣壁を捲り返していく。

「びぎいッ！ あがあッ！ ぎやひいひいッ！ 痛い……いらあ……ッ！」

スカートの裾が大きく乱れ、周りにいる下級悪魔たちにまで、人外のペニスに小さな秘孔を貫かれている様子を見られている。処女を失った秘孔は、破瓜の血がついた肉幹が入りして淫らに歪めさせられ、部屋中に滑らかではない挿入音を木霊させてしまう。

眼の前でおこなわれる陵辱劇に下級悪魔たちは興奮を抑えられなくなり、揺れ舐められる肉果実や大きなお尻、そして人外のペニスで貫かれる秘孔を凝視しながら、股間で勃起した細く長い淫根を自ら抜き始めた。

膣内にだけは出されまいと願っていた最中。突如胎内を貫く肉幹が激しく胸震えを起し、膨れた切っ先から灼熱の雄液を迸らせてきた。

龍人のペニスから吐き出された葛湯を思わせる陵辱液は、穢れない膣内の至る所に飛び散り、その灼熱感と粘度で彼女の肉体を強制的に絶頂へと昇らせていく。触手によってM字に拘束された肢体は背筋を仰げ反らせ、龍人の手と触手で揉みしだかれる肉果実が、大きく揺れながらその薄ピンクの先端を天へと向け震わせてしまう。

脳は初めて受ける肉交の絶頂に真っ白に染められ、嬌声をあげた唇が大きく開いたまま唾液を零してしまった。秘孔からは愛液が吹き出し、啞え込んだ肉幹をベトベトに濡らしながら、床へと濃い女蜜を滴らせていく。

（はひいひいひいひいっ！ 膣内に射精され……こんな魔物に……初めて奪われて……お腹の中まで穢され……）

肉体が悦痺れに痙攣し、彼女から力を奪い去っていく。後ろ手に拘束されていた両腕は抵抗する力を失い、頭から垂れる三つ編みと共に悲しく揺れ始めた。

膣内に吐き出された雄液は、その熱さと粘度で召喚師を夢見ていた少女を悲しい現実へと追い込み、陵辱液で灼かれた膣内が、人外に犯されてしまった事実を心に刻んでくる。

「どうだ精液の味は……だがまだ終わりではないぞ。その肉体の全てを犯し、精神が崩壊するまで精液を注ぎ続けてやるっ！」

ズジュツ……ジュプ……ビュルツ……ジュビュ……ジュプウウツ！

「くはああアッ！　なんでまだ……あうッ！　おかしい……もうやめて……もう犯さないでえええッ！」

膣内に射精された事で終わりだと思っていた陵辱が再開され、絶頂と浴びた精液で過敏にされた膣内を再び突き刺し始めた。しかも、今度は肉槍が射精し続けたままの陵辱である。膣への一突きごとに醜い切っ先から吐き出される雄液は、彼女の膣内全てを白濁に染め上げ、まるで仔を孕ませるかのように子宮内にまで流れ込んできた。

（こんなのダメ……突き上げられる度に全身が痺れて……何も考えられなく……）

リーネにとって本当の地獄が開始された。人外の精液によって常に絶頂させられる肉体は、ピストンする度に迸ってくる雄液に敏感に反応し、膣内が発電所にでもされたかのように立て続けの悦流が全身へと流れてくる。

子宮は激しく収縮を繰り返したまま胎内に出される雄液を飲み込み、ドロドロの陵辱液で満たされた膣内が火傷でもしたように熱痒い。秘孔からは白濁と混じった女蜜が吹き出したまま止まらず、二つの肉果実は、触手と手で揉みしだかれていますにも拘らず切ない焦燥感で包まれ、峰乳を潰されるほど圧迫されていなければおかしくなってしまうそうだ。

唾液を零す唇からはもう喘ぎしか洩らせなくなり、強制絶頂させられる苦しみ、水色の瞳からは止まらない涙が頬に伝っていく。

「くはッ！ もふ……許し……あふッ……おかしくなる……わたし……おかひく……」

「見ていただけで興奮するような顔になったじゃないか、小娘」

いながらも淫蕩に染まった顔を見た龍人が、彼女にさらなる恥辱を加えようと肢体に巻きつけていた触手を動かせ始めた。

両手を後ろで縛っていた触手が解かれ、その切っ先がうねりながらリーネの顔へ向かって伸び。腰を縛っていた触手の先端は、何かを求めるように彼女のスカートを捲りながら魅惑的なお尻を撫で、その谷間へ潜り込もうとしてくる。

「くはッ……はあはあ……かららが……熱い……っ!？」

射精されながら犯されるといふ異質な行為に濡れた嬌声をあげ、全身を苛む発情熱に呂律も回らなくなった彼女は、お尻の谷間に感じた異常な熱に息を呑んだ。ゴムのような弾力をしたそれは、首をひねりながら小さな窄まりを指し、何をしようとしているのかが一瞬で理解できる。

「んあああッ！ やめ……はうッ！ そんなところまれ犯されら……わらし……」

強制絶頂させられながらお尻まで犯される。その異質な行為に人間としての誇りまで奪われるような気になったリーネは、慌てて自由になった手をお尻へと向かわせ、色素の沈着していない尻孔を隠そうとした。しかし、それを許さないとばかりに、彼女の手を縛っていた触手が先液を垂らしながら瞳の前で鎌首を持ち上げる。

「さて啜えてもらおうか淫乱女、口からもタップリと飲ませてやるぜ」

「いや……ひッ!!」

声を震わせ、口を犯そうとする触手に顔を背けた瞬間。お尻の孔に生暖かい熱を感じ、短い悲鳴と共に身を竦ませた。

「やめ……て……」

ニユプッ！ ジュリユニユプズリユウウウウウウウウッ！

「くはッ！ ひいきやああああああああ——ッ！」

少女の願いも虚しく、尻孔に切っ先を突きつけた触手が肉胴をたわませ、亀頭状の先端を直腸に突き刺してきた。

小さな尻孔を無理やりこじ広げ、腸内に挿入り込んできた陵辱肉は、お尻の処女喪失に悲鳴するリーネを無視して蛇腹状の腸内を突き進み、突き破るような勢いでS状器官の奥壁を叩いてくる。

「くはッ！ はううう……んはッ……はあくうんんん……」

本来なら膣と同じような苦痛で虐げられるような行為。しかし、射精されながら膣内を陵辱され、魔の体液で全身を敏感にされた彼女は、その苦痛さえも心地いい痛みと変化し、早くも腸壁全体をムズ痒くさせ始めてしまった。悲鳴をあげたまま大きく開いた唇からはもう悩ましい吐息しか洩れず、後ろまで貫かれた刺激で膣内が大きく蠕動し、軽い絶頂を

与え続ける肉槍をきつく締めつけてしまう。

秘孔からは腔内に吐き出される陵辱液がとうとう溢れ出し、粘り糸を引かせながら床へと滴っていく。

「尻を突き刺したら前の締めまりまでよくなりやがったぞ、クク……次はここもだっ！」

「くはあんツ！ あはツ……はあはあはあ……ンぷツ!? ンぢゅぷちゅびゅぢゅぷううううううううううううううう——ツ！」

尻孔への挿入で大きく開けていた口腔に、今度は眼前に切っ先を向けていた陵辱肉が間髪いれずに突き刺さってきた。生暖かく、ネットリとした先液にまみれたその触手亀頭は、ゴム塊のような硬さで彼女の可憐な舌上を滑り、その醜い先端を喉にまで詰め込んでくる。少女の肉体は、瞬く間に窒息してしまいそうな息苦しさと包み込まれ、狭い喉に異物を収めた吐き気が込み上げてきた。しかし、強制絶頂させられる肢体はその屈辱までも被虐的な喜びと変化させ、肉交を知らなかった彼女の精神を蝕んでいく。

「んううううう……んふぁ……くふう……」

(全部犯された……わたしの全部……こんな魔物に犯され……)

悲しみが水紋のように心に広がっていく。だが不思議と絶望感が湧いてこない。それどころか挿入された全ての場所から激しい肉痒さが湧き上がり、精神が肉染に染め上げられていくのを感じる。

三つの孔全てを貫かれた肢体は、駄弁の体位から水平になるほど背を反らしてしまい、見ている下級悪魔たちにまでその痴態を披露してしまった。

「クク……膣だけじゃなく喉も尻もきつく締まり、俺のモノに褻を絡めてきやがる」

ジュプッ！ ジュリユッ！ ギュプジュリユッ！

「んふッ！ んぷッ！ ンあッ、んうッ、ンッ、ンえッ、んうんんンッ！」

膣を貫いたペニス、そして口と腸内に収まった触手が同時にピストンを開始した。

強制絶頂し続ける肉体は喉粘膜を擦り、蛇腹状の腸内を激しく削る触手にまで激しい悦痒さを感じ、全ての孔が膣にでもなったかのような快楽で三つ編みの少女を虐げ、彼女をさらに高い絶頂へと駆け上らせていく。

膣から発生し、喉と腸の刺激で倍増した快楽の電流は、リーネの肉体全てを悦痺れで包み灼きながら理性を狂わせ、脳に快楽以外の事を考えられなくさせてしまった。

射精ピストンを繰り返す雄槍が子宮口に填まり込む度に、瞳の奥ではバチバチとしたショートが繰り返す。全身の肌を騒がせる肉体は意思に反して腰を淫らに振りまくり、もっと濃い雄液が欲しいと秘孔から淫らな挿入音を奏でてしまう。

「くうおおっ！ こんな具合のいい雌は初めてだ！ お前らもこっちにきてこの女にチ○ポを擦りつける。精液まみれにして、こいつの全てを壊してやるんだ！」

触手で縛り上げていた峰乳から両手を放し、ニーソックスに包まれた太腿を抱え込むよ

うにして腰を突き上げ始めた龍人。彼はリーネの精神を恥辱で破壊しようとして周りで見ている。下級悪魔たちを呼び寄せ、その肢体を穢すように命じた。

「んうあああッ！ んぷッ……ふいやあ……ンぶッ……ンうんんんんんッ！」

（いやだ……これ以上身体を穢されるなんて……下級の悪魔にまで犯されるなんて……）  
力も弱く、醜い下級悪魔にまで肉体を穢される屈辱に身が震える。しかし、その潤んだ瞳に近づいてきた下級悪魔たちのペニスが映った途端。肉体が燃えているかのように熱くなり、心臓が早鐘のように高鳴ってしまった。

肢体はもつと淫らな部分を見せてみたいという欲望に両胸を大きく揺らし、頭を前後に動かして触手を啜える唇から唾液をしぶかせ、幼い顔からでは想像できない淫姿を披露してしまう。

「クク、そんなにチ○ポが気に入ったのか小娘。お前らも早くその粗末なモノでこの女を犯せ！」

何本ものペニスに囲まれて淫らに悶える少女の姿に笑みを零した龍人が、早く肢体の全てを犯すように下級魔たちに命じた。射精し続ける彼もそろそろ限界なのだろう、その禍々しい顔に余裕はなく、三つの孔から伝わる快樂で、今にもさらなる絶頂へ達しようとしている。

だが、犯せといわれても全ての孔は龍人の肉槍と触手に塞がれ、下級魔たちに挿入でき

る場所など残ってない。彼らは仕方ないとばかりにその枯れ枝のような淫根を肌に擦りつけ、その切っ先で肢体を突き始めた。

「くうはッ！ んふうううううううッ！ や……チュパッ……はむッ……いひ……」  
全身の肌それぞれ違う灼熱感の淫根が突き当てられ、醜い切っ先で汗にまみれた柔らかな肌を黴つてきた。肉果実やお尻には何本もの肉槍が群がり、少しでもその柔らかな肉に龟头を埋めようと突き上げてくる。

力なくダラリと垂れ下がっていた両手は、素早く彼女のもとに來た者に淫根を握らされてしまい、手筒とされて肉幹を扱かされてしまった。

「んふッ！ んはああアあああああッ！ からら中が熱……わらしもう……あふッ……もうダメエエエエエええええッ！ もつと……もつろおおおおッ！」

快樂が精神の抗いを破壊し、とうとう彼女に快樂を求める言葉を洩らさせた。

触手を啜えたままぐもつたその言葉を聞いた龍人は、今にも達しそうな絶頂を堪えるように歯を喰い縛り、腰の動きを速めていく。胎内に出された白濁を肉幹との隙間から溢れ返す秘孔は、ネチャズチャと粘り気の混じった挿入音を奏で、見ている全ての者を興奮させ射精へと導いていく。

「んあッ！ はふッ、んッ、んッ、んッ！ チュパッ……わらひ壊れ……壊れ……ひゃんんッ！ 早ふ……射精ひれ……アソコらけひやなく……わらひの全部に注いれッ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**